

## 半 世 物 語

平成24年5月19日(土) 10:00～11:30

元別子銅山文化遺産課長 坪井利一郎

### 1. はじめに

別子銅山の近代化により我が国の近代産業を育成し、住友グループの基礎を確立するとともに、今日の工都・新居浜を生み出したのは広瀬幸平翁である。維新时期から明治前半期にわたる異色の経営者自伝として、貴重な史料として評価の高い、広瀬幸平翁の「半世物語」を解説する。

### 2. 本の刊行

明治27年12月 紀州の湯崎温泉(白浜町)で原稿を書く

明治28年 3月25日 刊行(2刷まで刊行) 上下2冊和綴じ本

昭和31年10月10日 手書き版で復刻 合本

昭和36年10月10日 活字版で再復刻 合本

昭和57年 5月 5日 原本復刻 合本

原本の写真、幸平の写真、望烟楼揮毫の写真、目次、凡例、事項見出  
復刻のあいさつ 後記 付き

平成13年 4月20日 原本再復刻 合本

原本の写真、幸平の写真、望烟楼揮毫の写真、目次、凡例、事項見出  
復刻のあいさつ、後記 あとがき 付き

### 3. 本の構成

表紙

序文 陶庵主人(西園寺)公望識并書

序 春翠住友友純撰

緒言 広瀬幸平誌

卷之上(慶応元年～明治10年)

卷之下(明治11年～明治27年)

事項見出(別紙のとおり)

※ 初刊本の体裁は、上下2冊の和綴じ本。菊判(A5判)で、上巻は112頁、下巻は96ページ。3号級楷書体活字で、1頁5文字詰め11行。仮名は半分は変体仮名。

表紙は紙装。表紙と裏表紙には「望烟楼」の字が浅葱の地に浮き出しとなっている。

る。更に裏表紙には赤の地に「明治二十八年印行・半世物語全二冊・廣瀬蔵版」とある。

序文の西園寺公望の筆蹟は木版刷り。序の住友友純の序も書家・玉木愛石の筆蹟で木版刷り。

4. 事項見出（一、・・・とあるのに対して、一部は趣旨から分けてつけている。昭和57年原本復刻からつく。）

西園寺公望序文

住友友純序文

緒言

勤仕せる主人・・・・・・・・・・・・・・ 1

・・・・・・・・・・（90項目）・・・・・・・・

別子山出銅高累年比較表・・・・・・・・ 199

5. 公望の序文

余嘗為賞勳 局総裁農商務大臣具耆紳四人功績奏請叙勳

大阪広瀬宰平與焉余乃審 其状頗慕宰平為人 唯憾未由相見可

既而余弟隆出嗣住友氏 宰平以其主管來見 披襟暢談始慰

謁然而宰平淳樸 之氣融然薰人 盖其智慮識見皆將諸半世閱歷中

本与迂儒偽吏 紙上空論自有徑庭可謂 偉矣增者寄自著半世物語

謁度干余 余日宰平之効力住友氏 猶陳平於劉氏雖事有大小

而能維持其業干將 墜使宰平易地其所施設 未必遜陳平也

但陳平智有餘德不足 若吾宰平則藏智於德涵養有素是之為多善

明治二十八年 春王正月

陶庵主人公望識并書

私はかつて賞勳をなす

総裁局の農商務大臣とともに、老紳士四人の功績を叙勳に奏請する

大阪の広瀬宰平は、私のつまびらかにするを承諾するか否か

その状は人となす宰平をすこぶる慕う

ただ相い見るべき理由をいまだいかに思わず

既にして私の弟の隆麿は住友家の後継ぎに出ている

宰平はその主管を以て來見する

襟をひらき、滑らかにして慰みを話し始める

見るからにして宰平は淳樸(純朴)なり

この氣は融然(のんびりとして和らか)として薰人(高貴な人)なり

けだしその智慮、識見は皆な諸半世の閱歷の中なる

本来、ちょっとした役人先生の資質を与えられる  
紙上の空論は自からを謂うべき徑庭（へだたり）がある  
偉らさを増す者より、自から半世物語を著わす  
見るたびに私に求める  
私は言う、宰平は住友家に効力をなす  
なお、劉氏における陳平は大小があることと雖も  
しかし、干将がその業を維持したように(苦勞の末に名劍を製作したように)  
ついに、宰平を使わして、其の所の施設を変える（易地）  
いまだ必しも陳平に遜色ない  
ただ陳平智は、足りないほどのあまりある徳がある  
しかも吾が宰平すなわち、涵養の徳における蔵智は、  
すべてこれ多善をなす素がある

明治二十八年 春王正月  
陶座主人公望識并書

#### 【注】

- 耆紳四人：明治25年7月19日に明治勲章(勲四等瑞宝章)を、殖産興業に尽くした功績で受賞した渋沢栄一(第一銀行頭取)、古河市兵衛(足尾銅山経営者)、伊達邦茂(北海道開拓者)、広瀬宰平(住友総理人)
- 弟隆：西園寺公望の弟の大徳寺家6男・隆麿。明治26年4月17日に家督相続が行われ、15代家長の地位に就き、吉左衛門友純を名乗る。長兄の徳大寺実則は内大臣兼侍従長、次兄の西園寺公望は政治家、内閣総理大臣。
- 陳平：前漢の政治家。河南陽武の人。黄老の術を学び漢の高祖に仕え、曲逆侯に封ぜられた。恵帝の時、周勃と共に呂氏一族を誅して漢室復興に功があった。
- 干将：干将莫耶は呉の刀鍛冶夫婦。干将が呉王から名劍を作るように命じられて最高の材料を集めた。しかし、材料の鉄を溶かす炉の温度が足りず鉄が溶けない。そこで妻の莫耶の髪と爪を炉に入れてみると炉が激しく燃焼して鉄を溶かして陰陽双劍の名劍を作り上げた。

\*\*\*\*\*

#### なぜ漢文が読めなくなったか

日本人には外向と内向というのがあって、江戸時代までは外向といえば漢字・漢文であった。そして和文というのが内向であった。その両方があるのはじめて日本が成り立っていた。ところが明治時代になって外向はヨーロッパで、内向はやっぱり和文で変わらない。外向はヨーロッパとなったので漢字・漢文は居場所がなくなった。しかし、ヨーロッパを取り入れる時に日本は、直接ヨ

ヨーロッパ語を持ち込まないで、従来の外来語であった漢字・漢文の技術を使ってヨーロッパ語を漢字に一応置き換えて日本に取り入れた。だから日本は曲がりなりにも近代化のヨーロッパに追いついた。

明治以降、ことに大正、昭和になってだんだん漢文が読めなくなってきた。戦後にいってアメリカ文化が入ってきたこともあり極度に漢文が読めなくなった。

広瀬幸平の漢文と英語の賛のある「別子銅山図」「新居浜で店図」「立川で店図」は過渡期を表しているものである。西園寺公望の漢文の序文、住友友純の和文の序文のセットは、日本の漢語と和語の二重構造を示している。

\*\*\*\*\*

## 6. 友純の序文

住友家六代にわたり 57 年間仕えたのは、まさに中興の元勳である  
廃亡せんとする住友家財本の別子鋳業に身をなげうって隆盛させる  
住友家に対する無類の功労に感謝し、子孫・家人に伝えるべき宝である  
社会・国家への功績により勲四等瑞宝章を賜う  
36 歳以前は平凡で記載に値しないというのは謙遜である

## 7. 広瀬幸平に関する本

幸平遺続	広瀬満正
広瀬幸平小伝	広瀬歴史記念館
広瀬幸平と伊庭貞剛の軌跡	広瀬歴史記念館
住友の元勳	咲村 観
幕末「住友」参謀・広瀬幸平	佐藤雅美
黄金伝説（7章 広瀬幸平・別子新居浜編）	荒俣 宏
銅山に賭けた男たち（8章 住友の番頭）	坂本勲
広瀬幸平からまなぶもの	末岡照啓

## 8. 読み直しで目を引いた箇所

### P000 緒言

幸平が住友家に仕えたのは天保9年（1838）、11歳のころ。別子鋳山の難局に苦慮奔走した36歳以降を記述する。

名は満忠、字は遠図、幸平は通称。名と字は叔父の北脇淡水翁が名付けた。名に背かず住友家に**忠**勤し、**遠**大の事業を成就することを心に誓った。

幸平の通称は、明治維新で衛門の名称がなくなったので自分でつけた。人を主宰する任にあたれば公平に決めたいと考えからである。

36歳以降の業績の半分くらいしか自分でも認められるものでないが、住友家の家人の参考にしてもらい、その子孫の戒めにでもなればとのささやかな思いから書いたものである。その意をくんで読んでいただきたい。

### 《 上 卷 ー 慶応元年～明治10年》

- P010 本家吹所の銅蔵封鎖  
住友本家吹所には、旧幕府の丁銅幾許万斤を預かっていたので薩摩藩に倉庫を封鎖された。恐怖心から傍観するのみで、封鎖を解く任に当たる者がいなかった。堪えかねた幸平が奔走して封鎖を解いた。
- P013 給米停止と対策  
幕府が倒れて長崎御用銅がなくなり、鉱山用の安米もなくなり鉱山財政も困難になる。本家の財政もひっ迫する。幸平は紙製の預かり手形のようなものを発行する。法に触れる恐れがあったので幸平の私財を抵当にして木製の札を発行する。
- P017 別子銅山売却説  
住友本家の財政はますます困難になり、別子銅山を10万円で売却することを他の店員で決めた。幸平は血涙をそそぎ争議してこの無謀を止めるが、聞き入れられなかったら、明治維新後、破産没落した多くの旧豪商の中に住友家も入っていたかもしれない。
- P025 本家吹所の別子移転  
従来の荒銅を輸送して大阪で精錬するのと、新たに別子山麓の立川で精錬するのを経済比較した結果、山元精錬するようにしたので移転する。
- P028 鉱山司出仕  
明治元年9月に鉱山司に任命されて、外国人技師コワニーとともに生野鉱山に出仕する。中瀬鉱山、伊豆金山を巡視する。併せて東京の2つの出店の閉店の指揮を任されていたので、多忙の中で公私の用務をこなす。
- P036 火薬と盛山棒  
石材を切り出すのに火薬を使用するのを他で聞き、調査検討させて別子で火薬を使って鉱石を切り出すこととした。  
鉱塊に穴をあける鍛鋼の棒に定称がなかったので、盛山棒と命名した。
- P040 年頭の苦諫  
明治3年1月5日、安閑と旧来どおりの祝賀の宴を開く。幸平は「相変りて御芽出度候」とあいさつする。満座の人たちは不吉と失言をとがめる。幸平は、旧を捨てて新しきを取り、禍を転じて福とするように変わらなければ、住友家は安泰でなくなると説得する。  
席を改めて、床に別子銅山開基の友信の軸を掛け、開鉱当初の銅塊を飾りて、当主・重役たちに対して熱涙をもって諫める。それがあったから今の盛運がある。

P046 別子山上の醸造業

人間生活の第一位の飲食品は、山中では米を除いてはなはだ粗悪である。酒、味噌、醤油は6里離れた西条から来るが、酒は1／3は水、醤油は塩水に着色、味噌は下劣な味である。衛生上、雇員、労働者に有害なので小足谷に醸造所を新設する。

最初は水質が合わず、高地だったので寒冷で失敗する。係員の努力で山民の満足するものができるようになり、別子山の需要を満たすだけでなく、土佐の山村にも供給する。

P048 別子山の近代化

山民は字が読めなく物事を理解できるものがない。教育の必要性を感じ学校を設立する。そして尋常小学校、高等小学校は県下一になり称賛される。

続いて、病院、警察、貯金預所、郵便、電信、電話等が整う。

P053 コワニーの別子視察

コワニーが来山し、実況視察して「鉱煙から硫酸を作り、沈殿法と溶解法で精錬すれば莫大な利益を得る。」と提言を受ける。この時に外国人技師を招へいしたいと考えた。

P054 ラロックの雇用交渉

リリエントール社とルイ・ラロックの雇用契約を締結する。その締結について国の許可を取る手続きをすると、フランス語が理解できないことをいいことに、契約の中に理不尽で、憂慮すべき箇所が多々出てきて修正する。

明治7年3月にルイ・ラロックが別子山に来る。

P054 御代島築港

新居浜の海浜は遠浅いで新規購入の汽船・白水丸の繫泊に適さないので、無人島の御代島に波止場を築く。幸平はこの時に、自然に人の手を加えてより便利にする必要を自覚する。

P067 ラロックへの配慮

幸平は到底外国人を使える器量でないと誹謗された。それに逆らうのではなく忠告と受け止め、3箇条を心に決めて当たった。

1. 時間を違えない
2. 約束を守る
3. 保護手当を十分にする

通訳には塩野門之助を雇って当てた。通訳の功績も大きかった。

P071 白水丸就航・衝突事件

店員の中に航海術が分かる者がいなかったため、当初の間、幸平が船長で航行した。

播磨沖で和船と衝突して裁判になった時、弁護士などいないころなので幸平自

ら神戸裁判所に出頭して争った。勝訴して損害賠償の責を免れた。

P071 米穀輸出

米穀を輸出した時に、輸出先で荷揚げすると腐敗欠損等があつて外国商社から損害賠償で起訴された。神戸の初審では敗れたが、大阪に控訴して勝った。この時も弁護士に頼まず、宰平が法廷に立った。

P088 第一通洞

宰平は、長年の経験から将来の事業進展の必要性を確信して、反対するルイ・ラロックと激論を交わした末に第一通洞の開鑿に着手する。

P094 立坑道

宰平は、ルイ・ラロックを解雇した後に、鉱夫の中に熟練者がいない中、自ら率先して日本式の測量法で「目論見書」にある立坑道の開鑿に当たる。

P095 別子新道計画

宰平は、険しい山ではあるが、運搬道路を開設しないと鉱山の大事業大目的は完成しないと考えて、明治 8 年に牛車道建設に着工する。難工事の上に詳しい技師もいなく、日本式技術で困難を冒してついに明治 13 年に完成する。その全長さは海岸から別子山嶺までの 7 里あまりである。

新道開設で失業すると考えた村民が、馬の背の険しい道で宰平を突き落とす陰謀を企てたが、険路は輿丁(山駕籠かき)の肩を休めるので歩いたので偶然にも難を逃れた。

P102 回天丸・白水丸の沈没

回天丸は悪天候だから出航を見合すように宰平が言ったのに船長が聞き入れず沈没した。白水丸は修理するように忠告したのに聞き入れず出航して沈没した。二つの難破で職員や乗客を亡くした。

鉱山でも間歩の開鑿、運搬路の開設で多くの従事者を亡くした。もとはと言えば宰平の進取的観念と大成的豪気による国家、主家のための計らいであった。宰平に対する功勳の称賛は値しない。冥福を祈るばかりである。

《 下 卷 — 明治 11 ~ 明治 27 年 》

P102 外国商館との取引上の改革

商館の番頭に口銭を渡す悪習があり、その排除は困難と躊躇する人々があつたが、宰平は廃止した。

延売契約では外国商人よりまず証拠金を取って置いてから物品を渡し、代金を受け取る権利を占得した。

P102 人事刷新・伊庭貞剛

年功序列の旧習を守っていたのでは時世の進歩についていけないと看破したので、鴻池家、三井家を参考にして人材を得ることとした。伊庭貞剛、久保盛明、

加川勝美、広瀬担を雇い入れて重役とした。適任者を選抜して登用した。

P118 堂島米相場・五代友厚

米穀を買い占めて米価が高騰した。五代友厚の細民の困難を救うとの熱意に加わり、相場を崩して高騰を抑えた。この経験から投機的業務は真正な実業家のすべき事でないを確認する。幸平一生の過誤失格と自ら戒める。

P124 別子山新道と牛車

伊予地方には牛種乏しいので大津のコッテ牛を買い入れ、新居浜支店で牛を飼育した。牛夫も雇った。単に運搬のための目的だけでなく、農家公衆の利益も考えてのことであった。以後数年で伊予地方の村では耕耘、運搬に牛を使うようになった。

牛車道ができると二人曳きの腕車で往来させた。昔 6 人で肩に担いで苦勞して運搬していた時に比べると便利で早くなった。

おりしも晩秋だったので錦峰繡溪の風景書画よりも麗しく、遠近山水の眺望詩文を作って述べこともできないくらいである。

(錦繡峰と西赤石山から石ヶ山丈への尾根の紅葉を角野町時代に景勝地と命名したのは、半生物語の「錦峰繡溪」からの引用か。)

P130 住友家法の制定

住友家は一大旧家なのに口頭伝襲の慣例で物事を行っていた。永遠の隆運を図り商工業務の健全な発達のために家法を制定する。幸平が主宰者となって以来逐次規則を制定してきたものを集めて大成した。明治 16 年 1 月から施行する。(家法の施行は明治 15 年 3 月からである。家長は君臨すれども統治せずの立場が明らかにされる。)

P131 小足谷水抜工事

3 分の 1 を切り抜いた寛政年間に、幕府から下流の阿波に鉋毒の被害が及ぶから工事の中止が命じられていたと伝えられていた。幸平が開坑課長の時に、将来必ず湧水のために廃業に至る不幸を免かなければならないと信じ、幼稚な日本式の測量法で工事設計を作成し、開鑿を再開した。

夜業中に食事をとるのに、飲み物を温めるために炭木を燃やすと煙が坑内に充満して窒息死しそうになった。坑夫見習の者に大声を揚げて疾走させるといってっさの機転で、空気が動き危機一髪で助かった。明治 17 年の冬に竣工した。

(貫通は明治 17 年、完成は明治 19 年である。)

P134 坑底の湛水

鉋山の坑道を旧慣により「舗」という。わが別子山に二舗あり。本舗と前山舗と呼ぶ。(歓東坑と歓喜坑にあたる)

P137 新居浜分店の惣開移転

将来の発展を考えると手狭なので移転を計画するが、店員や重役たちは、旧態



依然とした考えや移転費用の巨額におののき躊躇して同意しなかったが、取りま  
とめて移転した。清水惣右衛門がすでに開拓した土地であり、惣開の名を得た所  
なので顕彰の記念碑を建てた。

(惣開の地名は清水惣右衛門が開拓する90年ほど前からあった。)

P139 別子の植林

23歳のころに会計を担当していた時に材木山の事務を兼務したことがあった。  
「百年の謀は徳を積むにあり、十年の謀は樹を植えるにあり」の先人の言葉を体  
現して杉苗を栽培させた。すでに成長して杉林になる。

鉱業の拡張に杉檜等の木材が必要であるので山林課を新設した。植林は鉱山業  
に必要なだけでなく、水利(治山治水)上からも大いに関係する。維新後の山林乱伐  
を嘆いてのことでもある。別子山の富源に鉱山以外にもあり、後年が楽しみである。

(本格的植林は明治になってである。苗種は明治以後檜が中心になっている。)

P143 新居浜付近の土地購入

新居浜分店も所有地でなく借地にすぎない。土地を所有していたら鉱業の永遠  
の発展を謀るにも憂慮することもない。別子鉱山の経営の許す限り、田畑、宅地  
を買い入れる。別子鉱山で消費する1年分の米穀の1/3を自前で賄う。道路開  
設、鉄道敷設においても妨害を受けることもなかった。煙害の苦情も多くは自分  
の土地なので穏便に済ませた。

P154 銀行業

国立銀行条例が発布されて、住友にも銀行を開設するように勧めが各方面から  
あった。銀行業は商業者の本業と言えない。住友は銀行業のような易しい事業は  
他に任せ、困難な事業に果敢に取り組み国家に貢献する。併せて主家の名誉と信  
用を得るために銀行設立の勧誘は固辞する。

P156 貯蓄資本の方策

不慮の大災害時のための資金確保として、西条藩の紙幣3000円を借り入れ  
てその利子を積み立てた。「ちりも積もれば山となる」の諺のとおりである。不慮  
の急需に備えたものなので本家が自由に使えないように書きつけておいた。

P160 沈殿法

雇い外国人から沈殿法を聞いて以来忘れたことはなかったが、急務の業務が多  
くて後回しになってしまった。明治13年に着手すると好成績を得た。廃棄物か  
ら銅を得る事業は、前途多望と言える。

P162 山根製錬所

明治19年、岩佐巖を招いて、岩佐の考えのもとに山根製錬所で沈殿銅と硫酸  
の製造に着手した。

(製鉄については触れていない。歴史的には鉱業から工業への転換点にもかかわ

らず、意外とあっさりと書いている。)

P162 採鉱事業の根本方針

工業の発展には、技師を雇い入れる必要性は感じていたが、坑間事業については学術と実験を併せ持つ技師が少ないので、容易には雇い入れなかった。

全く技師の力を借りず、宰平自ら鉱夫頭等に指示して開鑿事業を拡大して今日の盛況に至らした。ルイ・ラロックを雇い続けたり、学士の所説に一任して漫然従事させていたり、莫大な資金を浪費したりしていたら、見るべき功績もあげられたものではなかった。

鉱山業は他の生産業に比べたら困難なもので、緻密な考察と遠大な計画がいる。自然の恩恵に恵まれただけでなく、人の働きによるところが大きい。明治維新のときに、別子銅山を廃止したり、譲渡したり、また維持しても開発していなかったら今日の隆盛は得られていない。

P170 鉱山鉄道

欧米巡回中で最も刺激を受けたのは鉱山鉄道である。鉱山専用鉄道を利用すれば、運搬の便利だけでなく労費も軽減して利益が増大する。別子山に鉄道を敷設することを計画して明治26年7月に竣工する。

(下部鉄道の完成は明治26年5月、上部鉄道の完成は明治26年12月である。)

P172 製鉄業

岩佐技師から製鉄のことは聞いていたが腑に落ちないでいた。ドイツでは銅鉱石の貧鉱から鉄を採り重要産物となしているのを直接聞いて新規事業に取り組む決意をした。沈殿銅採取の銑鉄は購入していたので、使用量が増加傾向なのでその一部を自前で賄えれば支出を抑えられる。製鉄業育成の機運がおこってきたが、さらに発達させるために杉山昌大を招いた。これも住友家の利益を計るに止まらず、国家の利益に役立たんと考えからである。

製鉄業と鉱山鉄道は欧米漫遊で得たものである。

P172 別子開坑二百年祭

別子開基二百年祭挙行の費用に充てるために、あらかじめ相当の費用を積み立てて、明治23年に挙行了た。

祝宴の席で、アメリカ領事は「連綿と200年も一家が持続経営した鉱山は世界に例がない」と祝辞を述べた。

百五十年祭に逢い、二百年祭に臨む光栄、高運に感極まり言葉を失う。別子銅山産の銅で作った楠公の銅像を一大記念品として、皇居の二重橋の門外に設置する。神祇に願うところは、二百五十年祭、三百年祭、五百年祭とこれ以上の祝典が開催できるような不滅の名家、長盛の鉱山であってほしいことである。

## 9. おわりに

半生物語は、退職後に書きあげた自伝で、後半部の宰平が住友家で活躍した時期であるために「宰平が……した」との記述が目につく。近代化という歴史のうねりの中で卓越した指導力で引っばってきた自負の念が言葉となっている。

歴史は人を生むというが、宰平は住友の危機の時代を生き、逸脱的革新性で、独裁的にも評せられたが、明治維新において住友の事業を健全的に発展させた欠かせない人物であった。いかんせん、歴史は移っていて、「全組織を結合する組織者」タイプの経営者が求められるようになっていた。日清戦争のさなか、東奔西走の公望が宰平に住友家の将来に悪例を残さない花道の「依願退職」に1年を要した。明治27年11月15日に退職する。

明治30年以降、宰平は家長・友純家族が生活する須磨別邸のある須磨に隠棲した。番頭・宰平の任に一生を遂げた。

広瀬邸の二階・望煙楼に漢詩が掛っている。

高く一樓を築き、子孫に遺す

此の楼宜しく鉞山とともに存すべし

望煙ただに風致を愛でるにのみならず

報いんと欲す、積年金石の恩